



第29号 2026年3月13日発行

Chapel news

チャペルだより

2025年度 年間標語

「見よ、新しいことをわたしは行う」

「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。
あなたたちはそれを悟らないのか。わたしは荒れ野に道を敷き 砂漠に大河を流れさせる。」

(イザヤ書43章19節)

「公的校事としての礼拝」

寄付行為：総則第三条に「キリスト教の信仰に基づく人間形成の学校教育・保育を行うことを目的とする。」と謳われている。

歴史の中で、先達たちは、この目的を具現化するために様々な方策を講じてきた。その中で、変わることなく継承されてきているのが、礼拝である。キリスト教学校における礼拝は、教育活動の礎として、公的校事の筆頭に位置付けられている。

礼拝を公的校事として定める事は、憲法、教育基本法、学校教育法、私立学校法によって保障されている。

キリスト教学校における「公的校事としての礼拝」は、正しい福音宣教を介して教育共同体の存在の根拠を証しする。建学の精神を具現化し体現する。学生教職員が互いの立場を超えた一致を可能にする。歴史(伝統)を担い合い次世代へと継承する。帰属意識を養い、各自の果たすべき使命と責任性を明らかにすると考える。

かにすると考える。 アンフィクテオニー

神の民イスラエル(宗教的部族連合)の歴史、特に興廃隆替を観ると、神の箱(契約の箱)に対する民の姿勢、神礼拝が深く関連していた事が分かる。

本学が謳う「キリスト教の信仰に基づく人間形成」に対する社会の信頼と期待は大きく、責任ある応答が求められる。

公的校事として捧げる礼拝が御心に叶うようにと吟味し続けるならば、本学は益々神に嘉される教育共同体、神の栄光に仕える器として用いられ、発展を続けると信じる。

「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように。アーメン」

ロマ書11:36

宗教主任 永井 英司



ボランティアサークル The Peace Fellows

The Peace Fellowsは、30名ほどが所属するサークルです。建学の精神に基づき1年間を通して様々なボランティアに取り組んでいます。学内では週3回実施しているチャペルアワーの受付、キリスト教諸行事のお手伝いをしています。またコンタクトの空ケースなどを集め、関係団体に寄付することで支援に携わっています。学外では、山梨英和こども園や地域教会の環境整備のお手伝い、甲府YWCAなどのキリスト教諸団体と連携した活動もしています。その他にも山梨ダルクやフードバンク山梨の支援を通して地域にある課題解決のため、何ができるか考え活動しています。

「地域から世界へ、成長した1年」

私が印象に残っている活動は炊き出しです。このボランティアは、NPO法人やまなライフサポートが生活困窮者のために月に1回、甲府カトリック教会を会場として行っているものです。私が参加した日は、カレーと豚汁を作り、集まった30名ほどに配膳しました。印象に残ったのは、コミュニケーションをとることもなく、あまり感謝されなかったことです。「どうぞ」とトレーを渡し、「ありがとう」という会話を交わすのだろうと期待していましたが、言葉を交わす間もなく、悲しい気持ちになりました。しかし一方でそれは極限状態で生きているということなのかもしれないと思わされる出来事となりました。私は、高校時代からボランティアに携わってきましたが、この経験から、これまで「感謝されたい」という思いでボランティアをしていたのかもしれないという自分の姿勢を省みることができました。また、誰かから感謝されるためにボランティアをするのではなく、見返りを求めず、ただ必要としている人に手を差し伸べることが本当の奉仕活動であり、他者に仕えることなのだ気づかされました。また会場に集まってくる人たちを見て、私の住む地域に支援を求めている人が多く存在するという現状も認識させられました。

私は3年間のサークル活動を通して、成長することができたと思います。1、2年生の頃は、人前で自分の意見を伝えることが苦手で、心臓がバクバクして何も言えないほどでした。引っ込み思案な自分を変えたいという思いから、3年次に自ら立候補して部長になりました。2025年の春は、新入生にサークル紹介をし、サークルの魅力をどのように伝えられるかを考えました。それをきっかけとし、チャペルアワーの奨励においても、サークルの取り組みに協力してほしい思いを伝えました。そのほかにも毎週行っている部会や長期休み中の活動について、幹部たちと計画する中で積極的に自分の意見やアイデアを言えるようになりました。

The Peace Fellows 部長 3年 森田 七星



新たな一歩として6月には難民支援サークルに所属し、食を通じた難民支援活動に携わりました。夏休みには、アジアキリスト教教育基金(ACEF)主催の Bangladesh スタディツアーに参加し、Bangladesh の小学校を訪問して子どもたちと交流しました。私は、ツアー中に目の当たりにしたサイクロンで被災した小学校を立て直すクラウドファンディングを支援したいと思い、身の回りの人に協力してもらおうと考え、2025年度山梨英和大学学生チャレンジプロジェクトに申請しました。結果、採択され、Bangladesh の子どもたちの教育を支えるための活動を実施しました。内容は、写真の展示、Bangladesh の手工芸品のバザー、初等教育の必要性をまとめた冊子の作成、チャペルアワーでの奨励、募金活動の5つです。これらの活動を通して、学内の人や活動を知ってくれた地域の方々が協力してくださり、多くの寄付金を集めることができました。最終的には、小学校を再建するためのクラウドファンディングは目標金額を達成し、その支援金の一部を山梨から支援することができました。これらの経験が、「私にもできる」という強い自信になりました。

私は、難民支援活動とスタディーツアーを通して、世界にある課題についても学び、地域だけでなく世界にも目を向けるようになりました。かつての私のように「自分を変えたい」と思っている方は、小さな勇気を持って、小さな一歩から始めれば、大きく変われるということを信じて行動してほしいと思います。ボランティアに携わることで、さまざまな学年の人や先生、地域の人との交流があり、新たな自分との出会いがあります。私にとって、The Peace Fellowsの活動は、変革の場でした。これからも、挑戦し続け、地域や世界のために自分ができることを積極的に行っていきたいと思います。

○チャペルアワーを担当しました○

4月24日(木) 自分の事として捉える

7月 2日(水) 新しい歩み

12月3日(水) 「やってみたい」がはじめの一歩

学生教職員94名出席

学生教職員56名出席

学生教職員21名出席



活動報告

学内外でのボランティア活動や チャペルセンター諸活動をサポートしています

- 4月3日 聖書・讃美歌販売補助 サークル案内
- 4月7日 サークル紹介
- 4月23~24日 サークルブース担当
- 4月24日 チャペルアワー奨励『自分の事として捉える』
担当: 榎野彩華 林玲恵愛
- 5月26日~30日 キリスト教教育週間
- 6月12日 Thursdays in Black
- 6月18日 「子どもサポート山梨について学ぶ講演会」(31名)
- 7月2日 チャペルアワー奨励『新しい歩み』
担当: 森田七星 前嶋諒政
- 7月7日~22日 フードバンク山梨の支援
(食品の寄付を募るフードドライブ)
山梨ダルクの支援(日用品の寄付を募る)
- 7月22日 フードバンク山梨 物資の賞味期限分け・箱詰め作業
山梨ダルク 支援物資の箱詰め作業
- 7月18日 フードバンク山梨 物資寄付(61個7kg)
- 7月24日 山梨ダルク 物資寄付(23個4kg)

夏季休暇中

- 8月4日~6日 甲府YWCAピースフェスタ2025 お手伝い
会場設営、展示の設置、撤去(22名)
- 9月4日 炊き出しボランティア(5名)
- 9月18日 長坂聖マリア教会合宿
境内地整備、礼拝堂大掃除(18名)
- 9月19日 韮崎教会で礼拝、山梨英和ダグラスこども園で交流(7名)

10月7日~11月15日

おにぎりアクション
おにぎりの写真を撮影し、専用サイトに投稿することで、
アジア・アフリカの子どもたちに給食を届けることので
きるアクションです。

- 10月15日 半日修養会 受付奉仕

- 11月1日~2日 紅楓祭(学園祭) 肉まん販売
- 11月25日 第38回クリスマスツリー点火祭
第1部 クリスマスツリー点火式
設営・受付・スープ配布など
第2部 おたのしみのひととき
なぞなぞ、クイズ、クリスマスカード制作補助
- 12月1日~16日 フードバンク山梨の支援
(食品の寄付を募るフードドライブ)
山梨ダルクの支援(日用品の寄付を募る)
- 12月3日 チャペルアワー奨励『「やってみよう」がはじめての一步』
担当: 日向美空 深沢歩
- 12月12日 クリスマス礼拝 受付、献金奉仕など
- 12月17日 燭火礼拝 受付、聖書朗読など
- 12月18日 フードバンク山梨 物資寄付(106個23.5kg)
- 12月24日 山梨ダルク 物資寄付(74個6kg)
- 1月21日 「女性の人権サポート・くろーばーについて学ぶ講演会」
- 2月12日、13日、27日
フードバンク山梨 箱詰めボランティア
- 2月18日 フードバンク山梨 賞味期限分けボランティア
- 3月5日 ライフサポートやまなし 炊き出しボランティア(5名)
- 3月11日、18日 フードバンク山梨 賞味期限分けボランティア
- 3月12日、13日 フードバンク山梨 箱詰めボランティア



フードバンク山梨・山梨ダルク 仕分け作業



学園祭 肉まん販売



ライフサポートやまなし炊き出しボランティア



燭火礼拝



合宿1日目 長坂聖マリア教会 境内地整備



合宿2日目 山梨英和ダグラスこども園での交流



合宿2日目 韮崎教会の礼拝



チャペルアワー

フードバンク寄付



聖歌隊 Green Chapel Choir



「つながりを紡ぐ」

Green Chapel Choir 隊長
3年 村田 留愛

この1年のクワイアの活動を通して、キリスト教行事に関わる責任や全体を把握し管理する力が強く求められたと感じています。私は隊長という役割を円滑にこなす自信を持ってないまま1年を始めました。しかし、一つ一つの行事に向き合いながら、周囲の助けを受け、役割をこなすことができるようになり、成長できた1年であったといまは振り返っています。

クワイアは多学年によって構成されますが、3年生が私一人です。なんとか一人で頑張らなければならないという思いを強く持っていました。しかし、実際には隊員のみなさん、指導者の先生方、そしてほかのサークルで隊長を務める友人など多くの人の支えを受け、この一年を乗り越えることができました。色々な方が私を気にかけて、応援してくれました。

クワイアの隊長を務めた経験から、私自身も周囲の人を助けたいという思いがはぐくまれたと感じています。このような自身の変化を経験したいま、もしかするとクワイア

は歌うことだけでなく、代々受け継がれてきた「支え合い、助け合う力」というものがあつたのかもしれないとも気づかされました。もしそうであるならば、私はそれを次の代に伝えていくことも私の役割ではないかと思っています。

クワイアの魅力はキリスト教諸行事で歌うことです。しかしそれだけではなく、練習や合宿などを通して、隊員同士の繋がりが強くされることだと思います。隊長として不安を抱えたこともありましたが、いまは充足感があります。よりよい奉唱をするためにも隊員一人ひとりが安心して、楽しんで歌うことのできるクワイアとして、これからも練習を重ね、奉仕活動に努めていきたいと思っています。



学校行事やチャペルアワーで奉唱しています

入学式

キリスト教教育週間

チャペルアワー

七夕フェスティバル

甲府YWCAピースフェスタ2025

合宿

半日修養会

紅楓祭

クリスマスツリー点火祭

クリスマス礼拝

燭火礼拝

教会での賛美

卒業礼拝

学位記授与式 など



入学式



半日修養会



クリスマスツリー点火祭



七夕フェスティバル



紅楓祭



クリスマス礼拝



甲府YWCAピースフェスタ2025



紅楓祭



燭火礼拝

2025年度は奉唱する機会が多く与えられました。隊員は随時募集しています。興味のある方はチャペルセンターまで。



半日修養会 2025年10月15日(水)10時~12時30分



「コミュニケーションと人道支援」

講師 学長 塚本 俊也

プロフィール

●タイ国立マヒドン大学大学院健康社会科学部 修士課程修了 (HIV/AIDS予防教育)

セブンスデー・アドベンチスト(SDA)教団(プロテスタント)の牧師として、青少年伝道に従事。その後、国際NGO「ADRA Japan(アドラ・ジャパン)」日本支部長として、ルワンダ、コンゴ、東ティモール、アフガニスタンなどの紛争後の緊急支援、復興等に携わった。また国際NGO「Habitat for Humanity Japan(ハビタット・フォー・ヒューマニティ)」事務局長として、フィリピン、ソロモン、インドネシアの仮設住宅支援に従事した。それらの経験から、大学院などで国際協力や人道支援、紛争分析、危機管理を教えてきた。

4月に山梨英和大学の学長として遣わされた私は、これまで長年、人道支援に携わってきました。国際協力の現場に派遣され、緊急人道支援や復興支援に携わる際、まずどのようなプロセスを踏むでしょうか。またその際に大切なことは何でしょうか。その答えを念頭に、「リーダーの資質」というワークに一人ひとり取り組んでください。このワークシートには、「グループリーダーに望ましい資質とは何か?」という問いが記され、問いの下には、1~20の項目が挙げられています。例えば、1つ目には「健康で、いつも快活に人に接し、また指導者たる重圧を、あまり苦勞することなしに担っていきける。」とあります。このようにリーダーの資質が20項目記され、その中からもっとも重要だと思う項目を5つ選択するというワークに取り組み、その後、選択した5つの項目を

もとに、「リーダーシップとは?」という短い作文をしてください。これでワークは終了です。

続いて同じワークシートを、5・6人のグループで取り組んでください。グループではリーダーの資質として選ぶ項目もそれぞれでしょう。グループとしての決定をまとめるためにはじっくり話し合うことが大切です。ジェンダーバランスを考えたグループで1時間かけて話し合ってください。

個人とグループで取り組んだこのグループワークの目的は、グループ・ディスカッションによって、リーダーとして身に着けるべき資質について学ぶと同時に、お互いの意見や考え方が違う相手とコミュニケーションをとりながら、問題解決に導くことができるかを考えることです。

私が携わった国際NGO ADRA Japanのコソボ支援は、 次のようなスタッフでチームが形成されていました。

プロジェクトの
総スタッフ 137名

- 日本人24名 ■インド人医師1名 ■日系医師1名 ■オーストラリア人エンジニア1名
- アルバニア系スタッフ数98名(通訳、建築、看護師、医師、ドライバーなど)
- セルビア系スタッフ12名(通訳、看護師、医師、建設関係)

総勢137名が、緊急支援の現場で初めて出会い、目標に向かって協力体制を取らなければなりません。それは、民族や文化、言語が違って同じ目標に向かってプロジェクトを実施するチームを形成していくということです。また、国連のプログラムであるため、紛争している民族のどちらか一方に支援することはできず、両国のスタッフを雇わなければならないルールがあります。人道支援に携わる際、お互いを知り、スタッフ間のコミュニケーションを最善の状態にする必要があります。そのために人道支援の現場の初日に欠かせないこのグループワークを、学生・教職員のみなさんが体験し、それぞれが求めるリーダーシップとは何か考えてみてください。

参加した学生の感想

理想のリーダーについて、どんな考え方や、性格を備えているといいかをグループみんなで話し合っていくうちに、理想のリーダー像の要素がたくさんでてきた。その意見をまとめることが難しかった。それと同時に自分も、自身が考える理想のリーダー像のような人になりたいと思える良い機会だった。

自己を振り返る機会になり、自分のイメージの共有やコミュニケーションが取れ、とても実りのある時間となった。グループワークにおいては自分のリーダーの理想像とグループの人たちの理想像が違っていたが、話し合いを経て最終的には共通点が出たことに驚いた。



チャペルセンターでは、様々な活動を支援しています。

バングラデシュの子どもたちの教育を支えようプロジェクトに携わって
～バングラデシュの小学校と豊かな自然、人々の暮らし写真展～

1年 ヤスミンエムストサディア



12月に学内で開催されたバングラデシュの写真展と支援活動(「学生チャレンジプロジェクト」採択企画)に関わり、私の中で大きな気持ちの変化がありました。アジアキリスト教教育基金(ACEF)のバングラデシュスタディーツアーの中で撮影された写真を通して紹介されていたのは、決して特別ではない、けれど厳しい環境の中にある小学校の風景でした。床が整っていないかたたり、十分な設備がなかったりする教室の様子を見て、胸が締めつけられる思いがしました。

私はバングラデシュ出身ですが、こうした教育現場の現実を、これまで「自分ごと」として深く考えてこなかったことに気づかされました。プロジェクトを企画した森田さんに協力し、初めて外からの視点をもって内側から自分の国を見つめ直したように感じました。また、写真展とあわせて行われたバングラデシュ製品の販売では、多くの方が写真を見ながら話を聞き、製品を手に取り、

支援に参加して下さっていました。その一つ一つの行動が、遠く離れたバングラデシュの学校や子どもたちにつながっていくと知り、人の思いやりが国境を越えて形になることを実感しました。

私はこの活動に、バングラデシュ人として関わりました。写真展の他に、バングラデシュについて知ってもらふ冊子の作成にも協力し、自分の国について語ることは簡単なことではないと感じましたが、同時に大きな意味を持つ経験でもありました。バングラデシュで起こっている現実を隠さず伝えること、そして希望も一緒に伝えることの大切さを学びました。さらに、この写真展を通して、支援とは「特別なこと」をするのではなく、知り、感じ、心を寄せることから始まるのだと実感しました。チャペルセンターを拠点とし、この経験ができたことに心から感謝しています。

行動して、初めて見えたもの

4年 前島 美南



私は大学で心理学を学んできました。しかし4年間、障害のある方々や精神疾患を抱える方々などと実際に関わる機会はほとんどなく、知識を行動に移せないもどかしさをずっと感じていました。施設で働いてみたいという気持ちがないわけではありませんが、いざとなるとその一歩を踏み出す勇気もなく、気づけば「自分にはそこまでできない」と諦めたような大学生活を送っていたように思います。

そのような中、専門ゼミナールの先生からインドネシア異文化体験プログラムを勧めていただきました。海外に行くことなど1ミリも考えたことがなく、一生日本にいるものだと思っていた私にとって、その提案に正直とても驚きました。しかし、4年間ずっと行動に移せずにいたもどかしさと、4年生として大学生活を何かやりきれていない感覚が心のどこかにありました。海外に行くなんて社会人になったらそうそうできることではない、これが最後のチャンスだと思い、申し込むことを決めました。

今回のインドネシア異文化体験プログラムに参加して、日本の当たり前が世界の当たり前ではないことを、身をもって実感しました。水道水を直接飲むこと、エアコンで整えられた空間に当然のように身を置けること、家の中にトカゲや蜘蛛が頻りに現れないこと。それらが、日本だけの「当たり前」であることを改めて知りました。

これまでニュースで見聞きする出来事は、すべて想像の範囲にとどまっていた。しかし今回のプログラムで実際に現地を訪れ、多年草の植樹や川のゴミ拾いを通して行動に移せたことは、自分の中で大きな意味を持ちました。4年間ずっと感じていた、知っているだけで、動いていないというもどかしさが、少し解けたような気がしました。初めての海外で、環境に適応できるかと不安を抱えていましたが、どのようなトイレでも、どのようなシャ

ワーでも、やるしかないという気持ちで対応することができました。英語がほとんど話せない中でも、伝えたいという気持ちがボディランゲージとなって自然と体が動き、お金を払う場面では実際に紙幣を示して見せるなど、その場その場で工夫することができました。そのような経験を通して、自分の適応能力に自信がつけました。

プログラムの初期は、海外に来ているのに不思議なほど実感が湧かず、目の前の風景や出来事を事実として受け止めるだけで、心の底から感情が動きませんでした。しかし、さまざまな人との出会いの中で、その感覚は少しずつ変わっていききました。通訳の方が複数の言語を自然に使いこなす姿、村の住人がわざわざ出迎えに来てくれる温かさなど、そうした経験が積み重なり、人の温もりを全身で感じるようになりました。

宗教に対する考え方も、このプログラムを通じて大きく変わりました。これまでは、宗教とは何らかの団体に属することであり、一種の思考の縛りではないかとさえ思っていました。しかしインドネシアという、多くの人が信仰を持って生きる国に身を置き、十人十色の宗教観に触れる中で、そのイメージは覆されました。信仰とは、何かに縋ることで自分と向き合うことから逃げるのではなく、むしろ信仰を通して自分自身と向き合うことなのだと感じました。このことは、自分にとって最も大きな発見のひとつでした。

この旅で得た経験は、知識だけではなく、感覚として自分の中に残っています。言葉にきれいな場面や、胸が動いた瞬間の積み重ねが、今の自分を少し変えてくれたように感じています。

思い返せば、このプログラムへの参加を決めたこと自体が、自分にとって思い切った行動でした。海外など考えたこともなかつ



た自分が、飛び込んでみて気づいたのは、行動して初めて得られるものの多さでした。知識として頭に入れるだけでは決して辿り着けない感覚、人の温かさ、自分の中にある意外な強さ、それらはすべて、踏み出したからこそ出会えたものでした。

人との縁も、このプログラムが教えてくれた大切なものの一つです。村の住人が出迎えてくれた笑顔、言葉が通じなくても通じ合えた瞬間、共に行動した仲間との時間。そのひとつひとつが、

自分の中に確かに生きています。

自分と向き合うことの大切さを知ったこのプログラムは、今後の自分を形作る礎となると感じています。これからの人生でも、迷ったときには思い切って行動する勇気を忘れずに、目の前のチャンスを掴みにいける人でありたいです。そして、この旅で出会ったすべての人との縁を、大切に続けていきたいと思っています。

チャペルセンターについての追憶のようなもの

4年 中村 颯天



聖書と讃美歌を買った場所。それがチャペルセンターに対する最初の印象でした。私がボランティアサークルThe Peace Fellowsに入り4年の月日が経ちました。そして、程なく大学卒業と社会人生活の始まりを迎えようとしています。そのような中、大学生活を振り返り、私にとってのチャペルセンターは“職場と交流の場所”でした。

私は高校時代からボランティアに興味があり、大学入学と同時に当サークルに入会しました。毎週の部会と季節の活動に参加し、メンバーとしてのんびり大学生活を送っていたところ、3年目にしてサークルの書記を務めることになりました。サークルの部室のようなチャペルセンターに足を運ぶ日が必然的に増え、活動や行事に必要な準備、提出書類の作成、幹部ミーティング等を行いました。ここで昼食を何度取ったか、思い出せないほどです。

サークルの仕事以外でチャペルセンターに居ることも少なく、部会後や空きコマの時間に居座ることが多くありました。その際は学年を越えた仲間たちとの雑談をはじめ、麻雀に興味のある部員への簡易的な麻雀講座も開催したこともありました。

また、学生だけでなく先生方との突発的な交流も幾度もある場所でした。今年からはアクティブすぎる学長とも面識ができ、ここまで先生方と近くで話ができる大学はそうないと思います。礼拝奉仕などで訪れた牧師やボランティア先の方の話を伺うこともしばしばあり、昨年は燭火礼拝後にフランクフルトを焼き、他サークルの方たちと一緒に疲れ様会を催したことも今となっては懐かしく思います。

4年生になってからは、よりチャペルセンターを訪れることが増えました。顔見知りの誰かがきつと居ると踏んでいたからです。最近では旅行のお土産を届けに足を運ぶほど、自然体に近い状態でいられる憩いの場としています。私はこれまでThe Peace Fellowsの活動を通して学内外の様々な人と関わり、対話能力の基礎を会得しました。そして、その能力がチャペルセンターでの数多の交流で活かされ、自身の視野と価値観の拡張という人間的な成長に繋がったと考えています。チャペルセンターでの賑やかな日々は私の大学生活における良い思い出です。

新たな出発

高橋 寛子 教授(宗教委員)



先日、アニメーション映画「キング・オブ・キングス (THE KING OF KINGS)」を試写会で観る機会を得ました。この映画は韓国スタッフを中心に制作され、2025年大ヒットとなりましたが、日本でも3月末から全国の映画館で上映されることになったようです。

映画では聖書にきわめて忠実にイエスキリストの生涯が描かれていましたが、感情に訴えかける過度な演出だったわけではないのに、上映中幾度か涙を流す様子の方々が見られたことが印象的でした。かく言う私も、馬小屋のイエス誕生のシーンから涙が流れました。この無垢な赤ちゃんが30数年後に十字架上で壮絶な最期を迎えることを想い、その生涯を重ねて見ていたのかもしれない。結末を知らないで観ることが映画の醍醐味かもしれませんが、すべてを知っていても(知っているからこそ)、この映画には観る価値があるのだと思われました。

3月は卒業・巣立ちのときです。送る人にも送られる人にも、さまざまな想いが去来していることでしょう。山梨英和大学を退職する私も、13年間に会った多くの学生や院生たち、そして教職

員の方々との交わりをあらためて想起しながら日々を過ごしています。

いまだ人生の途上にいる私たちは、これから誰と出会うのか、何が起きるのか、いくつまで生きるのか、そして自分がどのように最期を迎えるのかを知りません。映画を観るように逆から辿ることはできませんし、人生においては何が正解で何が失敗なのかもわかりません。将来への答え合わせはできないのですが、それが生きていくということであり、私が40年間携わってきた心理臨床の本質もそこにあるのではないかと考えています。

今回の別れもけっして終わりではありません。わからない中にもいながらも、今また、新たな出発をしようとしています。山梨英和大学で過ごした大切な時間がそれぞれに活かされながら、これからの人生の道ゆきに神様がいつも変わらず共におられるようにとお祈りしています。

チャペルセンター 2025年度のあゆみ

年間標語

「見よ、新しいことをわたしは行う」

2025年

◆4月15日

始業礼拝 塚本俊也学長

◆5月26日～30日

キリスト教教育週間

テーマ:「新しいことをわたしは行う」

26日(月)「神様の愛と赦し」齋藤彩(日本基督教団日下部教会牧師)

27日(火)「難民支援に携わって得たもの」牧萌香

28日(水)「インドの奇跡」塚本俊也学長

29日(木)「欠けがあるからこそ」森島泰則(山梨英和中高校長)

30日(金)「新しい人間(ひと)」永井英司宗教主任

◆6月13日

「こどもサポートやまなしについて学ぶ講演会」

◆7月7日～21日

山梨ダルク 日用品の寄付

フードドライブ in 山梨英和大学

第1・2クォーター チャペルアワー(4月15日～7月17日)

全36回 ※キリスト教教育週間を除く 平均出席者数:84名

◆9月24日

後期始業礼拝 塚本俊也学長

◆10月13日～24日

「難民」について知るプロジェクト「Meal for Refugees」

難民支援有志グループGood Samaritansの学生が中心

となり、学食で難民支援につながる料理を販売しました。

購入金額の一部を難民支援協会へ寄付しました。

メニュー:

まるやかチキンカレー&ナッツとレーズンのパンプディング

パキスタン風炊き込みご飯ビリヤニとカレンのココナッツミルク白玉

◆10月15日

半日修養会

講師 塚本俊也学長「コミュニケーションと人道支援」

◆11月25日第38回

クリスマスツリー点火祭

第1部 点火式

第2部 おたのしみのひととき

◆12月1日～16日

山梨ダルク 日用品の寄付

フードドライブ in 山梨英和大学

◆12月12日

クリスマス礼拝

説教 永井英司宗教主任

◆12月17日

燭火礼拝

2025年度クリスマス募金・献金

募金・献金総額:46,000円

(クリスマス募金:14,813円、クリスマス献金:31,182円)

送り先:

- ・ひかりの家 11,500円
市川三郷町 発達に障害があるこどものための通園施設
- ・山梨ダルク 11,500円
甲府市 薬物依存からの回復・社会復帰を支援する施設
- ・ノット・フォー・セール・ジャパン 11,500円
東京都武蔵野市 人身取引問題に取り組む団体
- ・アジア学院 11,500円
栃木県那須塩原市 アジア農村指導者養成専門学校

2026年

◆3月12日 卒業礼拝

第3・4クォーター チャペルアワー(9月24日～1月15日)

全35回 ※半日修養会とクリスマス礼拝を除く

平均出席者数:23名

学生による奨励、地域の牧師による奨励など、豊かな礼拝を捧げることができました。

◆チャペルセンターのご案内◆

人と人が出会い、集う場所

チャペルセンターは、学生のみならず、教職員、同窓生など多くの方々にかかれた場所です。どなたでも大歓迎のオープンスペースです。

こちらをご覧ください

大学webサイト「チャペルセンター」

<https://www.yamanashi-eiwa.ac.jp/guide/campus/chapel/>

チャペルアワーやその他のイベントについては、大学webサイトで詳しくご覧いただけます。

発行 2026年3月13日

山梨英和大学 チャペルセンター

〒400-8555 山梨県甲府市横根町888

TEL(055)-223-6020 (代)

編集後記

「見よ、新しいことをわたしは行う。」という年間標語のもと、学生活動が活発に行われた一年でした。グリーンチャペルクワイアはキリスト教諸行事での奉唱に加え、学園祭の舞台上で歌声を披露しました。The Peace Fellowsは地域にある課題に向き合い、解決のために動く団体と連携し多くの活動に取り組みました。12月にはチャペルアワーを行っているグリーンバンクホール前で、アジアキリスト教基金が主催するバングラデシュスタディツアーに参加した学生が、バングラデシュの日常と教育環境を伝える写真展を開催しました。

本学は2025年8月にインドネシア国立ガジャマダ大学と教育協定を締結し、「インドネシア異文化体験プログラム」が新しく創り出されまし

た。このプログラムに参加した8名の学生は多民族、多宗教の人びとがどのように共に生きているのかという問いを持ってインドネシアに赴き、ガジャマダ大学の学生との交流、インドネシアの社会課題についての学び、解決のためのボランティアなどに関わりました。異なる宗教や文化、価値観の中に身を置いた数日間の現地の方との交流は「共に生きる隣人」としての出会いとなりました。山梨の地から世界に目を向けた活動は、山梨英和設立当初の宣教師の祈りの一つであったように感じています。これまでの積み重ねの上に新しいものを加え、「敬神・愛人・自修」を実現していくための活動を広げていきたいと願っています。(K.O.)